ミニ内航海運史　Ⅰ　古代

古代の船

縄文時代（紀元前８０００～３００年頃まで）に、既に日本で船が使われていたことは、出土品によっても知られている。一本の木をくり抜いて造った丸木舟がそれであるが、その後、丸木船の両側に波よけの板を取り付けるようになり、次第に船の形が発達して行ったとされている。さらに、弥生時代（紀元前３００年～３世紀頃まで）には、朝鮮半島や中国にまで航行する航洋船が現れたともいわれている。

各地の船どころには、神代からの伝説があり、例えば宮崎県の細島港は、日向高千穂宮を発した神武天皇がここから船を利用して、瀬戸内海、紀伊熊野経由で大和地方の制圧に出発されたとされている。また、広島県の倉橋島や備後・浦崎は、神功皇后が崩御された仲哀天皇に代わって２００年頃朝鮮半島に船で軍を進め、新羅を制圧した際の航洋船の建造地、寄港地と伝承されている。『万葉集』の額田王の歌の中にも、「熟田津に船乗りせんと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎいでな」とあり、これは新羅征伐に向かった際に、伊予の熟田津で詠んだとされている。

しかし、これらはいずれも神話であり、歴史的証明はされていない。とはいえ、そうした古い伝承を生む下地としての歴史が、全国の内航海運の船どころには多数存在しているのである。

丸木舟　千葉県大網白里町出土
（写真提供 ： 千葉県立安房博物館）

丸木舟　千葉県富津市出土
（写真提供 ： 千葉県立安房博物館）